

List of exhibits

・ Works on display may change without notice.

No	Title	Artist / Puroduced area	Period / Century	Material	Size(cm)	Colleciton / Accession No.
1	Mt. Fuji with Inscription	MOCHIZUKI Gyokusen (1794-1852); inscription by Sengai Gibon (1750-1837)	Japan, 19th century	ink on paper	32.5×53.8	Gifted by Mr. Kudo Hirohisa, 2025
2	Blouse, <i>kebaya kutubaru</i> , design of flowering plant		Indonesia, 1950s-1960s	synthetic fiber cloth	64.5×116.5	Gifted by Mr. and Mrs. Lee Kip Lee, 2025
3	Waist sash, <i>stagen</i>		Indonesia, 1950s-1960s	cotton	13.0×234.0	Gifted by Mr. and Mrs. Lee Kip Lee, 2025
4	Shoulder-cloth, <i>selendang</i>		Indonesia, 1950s-1960s	silk?	52.0×180.0	Gifted by Mr. and Mrs. Lee Kip Lee, 2025
5	Blouse, <i>kebaya kutubaru</i> , design of flower		Indonesia, 1960s-1970s	synthetic fiber cloth	72.4×149.0	Gifted by Mr. and Mrs. Lee Kip Lee, 2025
6	Special exhibit Skirt-cloth, <i>kain panjang</i> , design of <i>semen</i> (concept of cosmos in Hinduism) patterns	Solo, Central Java	Indonesia, 19th-20th century	cotton	105.0×239.0	Purchased in 1995 14-Hd-212
7	Design sample of weft weaving: plant patterns		Cambodia, 2025	silk	96.0×104.3	Gifted by Ms. Cornelia Bagg Srey, 2025
8	Design sample of weft weaving: floral lozenge patterns		Cambodia, 2025	silk, gold thread	97.7×101.3	Gifted by Ms. Cornelia Bagg Srey, 2025
9	Design sample of weft weaving: plant patterns		Cambodia, 2025	silk	97.0×99.8	Gifted by Ms. Cornelia Bagg Srey, 2025
10	Skirt, design of geometric patterns		Cambodia, 2025	silk	93.5×52.8	Gifted by Ms. Cornelia Bagg Srey, 2025
11	Autumn landscape		Korea, 15th century	ink and light color on silk	34.7×22.1	Purchased in 2025
12	Tea bowl known as "Hakusan," Shino type	SATO Sukekuro (1896-1979)	Japan, dated 1963	ceramics	H. 9.1, M.D. 11.2, D. 12.7, B.D. 7.0	Purchased in 2025
13	Bamboo flower vase of <i>ichiju-giri</i> type, known as "Shibagaki"	MATSUNAGA Yasuzaemon (1875-1971)	Japan, dated 1963	bamboo	H. 31.2, W. 6.8, D. 5.3	Purchased in 2025



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

新収蔵品展

Exhibition of New Collections

会期 2026年5月27日|水|-7月26日|日|

会場 古美術企画展示室

令和7年度（2025）に寄贈や購入によって新たに収集した古美術作品をお披露目します。

出品リスト・解説

・ 作品データは、出品番号、作品名、作者、時代、材質、サイズ(cm)、寄贈者名、作品解説の順に記載しています。
・ いずれも該当するデータがない場合は省略しています。
・ 都合により展示作品を変更する場合があります。

寄贈

1 富士画賛

望月玉川（1794-1852）画、仙厓義梵（1750-1837）賛
江戸時代 19世紀
紙本墨画
縦32.5 横53.8
2025年度 工藤洋久氏寄贈

望月玉川が富士の山容を描き、仙厓義梵が「鳴かずとも我が日の本の初鳥」と賛を記した作品です。

望月玉川は名を重輝、字を子瑛といい、江戸時代後期から幕末にかけて活躍した絵師で、望月玉蟾（1692-1755）、望月玉仙（1744-1795）と続いた望月派の三代目として知られています。玉川の作品はあまり残っていませんが、初代、二代が色彩豊かな人物画を得意としたのに対して、写生風の端正上品な画風になったとされます。

本作のように、淡墨の微妙なグラデーションを駆使して山容や雲霞をあらわすのは、上述の玉川の画風とも合致しているといえるでしょう。

賛を記した仙厓義梵は、江戸時代に活躍した禅僧です。日本最初の禅宗寺院である博多・聖福寺の住持を長く務めました。書画に巧みで親しみやすい作品を通して分かりやすく人びとに禅の教えを伝えたことから、「博多の仙厓さん」と呼ばれて慕われました。

賛にある初鳥とは、新年に姿を見せる鳥のことで、富士山と同じくおめでたいモチーフとされます。山の中腹あたりに印章（ハンコ）を捺して、富士山から昇る初日の出に見立てているのもめでたさを倍増させる工夫でしょう。

ところで、初鳥をテーマにした賛を書いているのに画面に鳥の姿が描かれないのはどういうことでしょうか。鳴き声や姿がなくとも初鳥はめでたいのだ、と強弁しているのか、あるいは、画面の中にこっそりしよばせているのかもしれませんが。そう思って画面をよく見てみると、「初」の字の1画目がなんだか鳥の姿に見えるような…、というのは考えすぎでしょうか。いずれにせよ、仙厓らしいユーモアが込められた賛です。

2 草花文様機械レース織ブラウス（クバヤ・クトゥバル）

インドネシア 1950-60年代
合成繊維
丈64.5 総幅116.5
2025年度 リー・キップリー夫妻寄贈

3 帯（スゲタン）

インドネシア 1950-60年代
木綿
縦13.0 横234.0
2025年度 リー・キップリー夫妻寄贈

4 肩掛（スレンジン）

インドネシア 1950-60年代
絹（シフォン）か
縦52.0 横180.0
2025年度 リー・キップリー夫妻寄贈

5 花文様プリントブラウス（クバヤ・クトゥバル）

インドネシア 1960-70年代
合成繊維
丈72.4 総幅149.0
2025年度 リー・キップリー夫妻寄贈

特別出品

6 スメン文様腰布（カイン・パンジャン）

中部ジャワ・ソロ産
インドネシア 19-20世紀
木綿
縦105.0 横239.0
1995年度購入（14-Hd-212）

「クバヤ・クトゥバル」（No.2、5）という上衣を中心とした衣装のコレクションです。「クバヤ・クトゥバル」とは、東南アジアの女性が身に着ける腰丈の短い前開きの上衣である「クバヤ」の一種で、インドネシアのマレー系の女性が身に着ける衣装のことです。

当館では、東南アジアにわたり、現地の女性と結婚して定住した中国からの移民の子孫であるプラナカンの家系である、シンガポールのリー家より、3度にわたってプラナカンの衣装などを寄贈いただいております。今回のご寄贈が4度目となります。

《スメン文様腰布（カイン・パンジャン）》（特別出品、No.6）のような染料を弾く蠟を使って布地の上に文様をあらわすパティックは当館を代表するコレクションのひとつです。今回、帯（No.3）と肩掛（No.4）も併せてご寄贈いただいたので、フォーマルなセットアップを再現展示することができるようになりました。

7 植物文様緯紋織文様見本裂

カンボジア 2025年
絹、金糸
縦93.4 横107.7
2025年度 コーネリア・バッグ・スレイ氏寄贈

8 植物文様緯紋織文様見本裂

カンボジア 2018年
絹
縦97.0 横99.8
2025年度 コーネリア・バッグ・スレイ氏寄贈

9 花菱文様緯紋織文様見本裂

カンボジア 2025年
絹、金糸
縦97.7 横101.3
2025年度 コーネリア・バッグ・スレイ氏寄贈

10 幾何学文様緯紋織スカート

カンボジア 2025年
絹
縦93.5 横52.8
2025年度 コーネリア・バッグ・スレイ氏寄贈

カリフォルニア在住のカンボジア染織研究者であるコーネリア・バッグ・スレイ氏からご寄贈いただいたカンボジアの緯紋織（チョラバップ）の見本裂12点のうち3点（No.7～9）及びスカート（No.10）です。紋織とは、文様を複雑な組織で織り表す技法のことで、緯糸で表す場合を緯紋織と呼びます。すぐれた染織作品を多く生み出したカンボジアにおいて、紺とともに有名なのが紋織です。絹や金糸といった高価な素材を用いて、華麗で多様な文様を織りだしたカンボジアの緯紋織（チョラバップ）は、主に宮廷で王や貴族が着用する衣服に用いられる高級品であったと考えられます。

スレイ氏は、こうしたカンボジアの伝統的な染織技法や多彩な文様の継承や保存を目的に、見本裂を制作しサンプルとして各地の美術館へ収める「チョラバップ・パターンバンク」というプロジェクトを企画しました。

当館はカンボジアの染織作品の収集や展示に長年取り組んでおり、こうした活動を評価いただき、今回のご寄贈につながりました。

購 入

11 秋景山水図

朝鮮王朝時代 15世紀
絹本墨画淡彩
縦34.7 横22.1
2025年度 購入

河にかかる橋を渡る驢馬に乗った旅行者が画面右下に描かれます。橋の先には広葉樹や枯木からなる樹々が広がり、その向こうになだらかな山々が連なっています。

画中人物になりきって歩を進めていくと、思いがけず奥へ奥へと引き込まれてしまう、小品ですが豊かな広がりを感じさせる作品です。

こうした奥行を生み出しているのが、水墨を駆使した岩肌や山々の表現です。手前側は濃い墨で筆痕を感

じさせるように描くことでごつごつとした岩肌を表現しています。ですが画面中ほどを過ぎたあたりから、淡墨のグラデーションをいかした表現へとかわって、次第に山々は霞んでいきます。

こうした水墨による奥行表現は、中国・北宋時代に大成された山水画にルーツを持ちます。1392年に李成桂によって創建された朝鮮王朝において、王室の人びとは多数の北宋絵画を収集するなど、北宋文化に対する強い憧れの気持ちを抱いていました。その結果、この《秋景山水図》のように、北宋時代の山水画の表現をよく学んだ作品が描かれるようになりました。

朝鮮王朝では、16世紀頃を境に、中国絵画を手本としながらも次第に独自の表現も模索されるようになります。本作では、そうした独自表現はほとんど見られず、手本とした中国絵画の表現に忠実に倣おうとする意欲が強く感じられます。そのため、本作の制作時期は15世紀に遡ると考えられますが、この時期の作品は現存数が極めて少ないため、大変貴重です。

12 志野茶碗 銘「白山」

佐藤助九郎〔助庵〕（1896-1979）
昭和38年（1963）
陶器
高さ9.1 口径11.2 胴径12.7 高台径7.0
2025年度 購入

口縁にうねりをつけた半筒形の茶碗です。柔らかな乳白色を基調としながら所々に赤味を生じた志野特有の釉調と、鉄絵で力強く描かれた垣根か鳥居のような文様が目を引きま

本作を手がけたのは、佐藤助九郎（本名は健太郎）。富山県砺波市に生まれ、富山鉄道、佐藤工業各社長、高岡新聞社（現・北日本新聞）取締役等の要職を歴任したほか、貴族院議員を務めるなど地方政財界で活躍しました。

書画、俳句、茶の湯を愛した数寄者としても知られ、号の「助庵」は、佐藤が師として仰いだ松永耳庵から授けられたものです。作陶にも非凡な才能を発揮し、本作をはじめ多くの優れた茶碗を遺しました。

本作を納める箱の蓋には、昭和38年（1963）11月30日、耳庵翁89歳の箱書きがあり「白山」と命銘しています。銘の由来は不明ですが、北陸の霊山である「白山」あるいは立山連峰の壮大さを本作に重ねたのかもしれない。

13 竹一重切花入 銘「芝垣」

松永安左工門〔耳庵〕（1875-1971）
竹製
昭和38年（1963）
高さ31.2 幅6.8 奥行5.3
2025年度 購入

電力業界を代表する実業家であり、「耳庵」と号する茶人でもあった、松永安左工門〔耳庵〕が自ら手掛けた竹花入です。扁平にひしゃげた細い竹筒を用い、中段の節下を引き切って花窓を空け、一重切の掛花入に仕立てています。表面には微細な縦筋線が無数にあらわれ、正面下部に生じた染みととみに一種の景色をなしています。背面に黒漆で「芝垣 耳庵八十九（花押）」とあるほか、本作を納める箱蓋の表には「竹花入 銘芝垣」、裏には「卅八年七月廿一日 老樾山莊 耳庵八十九（花押）」と墨書があります。いずれも耳庵翁自身が書きつけたもので、数え89歳の耳庵翁が、小田原に築いた邸宅である「老樾莊」において制作したものと分かります。「芝垣」という銘の由来は不明ですが、表面にあらわれた縦筋線をそれに見立てたものと考えられます。

耳庵翁が自作した茶道具は比較的多く、当館では書や茶杓、蓋置などを所蔵しています。ですが、花入はあまり知られておらず、大変貴重です。

おわりに

以上、令和7年度（2025）に福岡市美術館の古美術部門において、ご寄贈および購入によって新たに収集した作品をご紹介します。

最後になりますが、このように貴重な作品を当館へご寄贈くださいました、ご寄贈者の皆様に深く感謝を申し上げます。